

『怪談四代記』を読む

▲酒井 董美▼

小泉凡氏の書き下ろし近著である。著者は言わずと知れた小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)の曾孫。現在、島根県立大学松江キャンパス教授である。

内容は第1章キャサリンから聞いた話から最終章「凡」の因果、まで15章におよんでいる。それは八雲による怪談の紹介から、その話の持つ八雲の生育にかかわる背景を説き起こしているが、身内だけが知り得る資料に裏付けられ、誠に興味深い。その他、八雲以外

に小泉家に伝わる怪談、あるいは奇談的説話を紹介しているが、これまた著者をはじめ、一族の体験を踏まえたものだけに安易に読み過ぎせない含意に富み、八雲を理解するための必携書となっている。

「運ばれる怪談」では1991年2月、ハワイ

八雲の書いた「むじな」ところ、それを紹介した

著者の海外旅行の中で、意外な縁者との出会いや発見の数々は、祖先の運命の糸に操られていると思えない不思議なものであるが、このようにして八雲の偉大さが、世界各国に根付いていくものであることを、

八雲の理解に富む含蓄

身内だけが知る資料も



怪談四代記

人物の急逝から始まり、次々とよくないことが起こり、放出した話。さらにわが国、民俗学の父・柳田国男の兄、井上通泰の屋敷・南天荘を小泉家が購入し、しばらく住んでいた話(「お化け屋敷の思い出」)。(山陰民俗学会会長) (講談社・1728円)

大学でのアジア怪談会議の発表の中で、ある女性がドライインのトイレに入ったなら鏡の中で長い赤毛の髪を解かず女が見えて、鏡をのぞくと女に顔がなかった。彼女は悲鳴を上げてトイレから飛び出した。このトイレは今も撤去されてしまっ

たが、ドライインにトイレが存在していた間、何も知らずに入った女性から、顔のない幽霊を見たという報告が相次いだとい

「如意輪観音の呪い」では第2次大戦前、小泉家が貸前店で購入した如意輪観音を中庭に置いた

と、そのころ、それを紹介した

著者の海外旅行の中で、意外な縁者との出会いや発見の数々は、祖先の運命の糸に操られていると思えない不思議なものであるが、このようにして八雲の偉大さが、世界各国に根付いていくものであることを、

著者の名「凡」にまつわる秘話も大切である。第2次大戦後のアメリカ占領時、最高司令官マッカーサー元帥の軍事秘書ポナー・フェラーズは天皇を戦犯として裁かないよう進言し、象徴天皇制

の実現の端緒を築いた人物だが、彼と小泉家とは浅からぬ関係があり、祖父一雄氏はポナーの了解を得てここから孫である著者を「凡」と命名した話

もまた奇談であろう。

「如意輪観音の呪い」

では第2次大戦前、小泉家が貸前店で購入した如意輪観音を中庭に置いた

と、そのころ、それを紹介した

著者の海外旅行の中で、意外な縁者との出会いや発見の数々は、祖先の運命の糸に操られていると思えない不思議なものであるが、このようにして八雲の偉大さが、世界各国に根付いていくものであることを、

著者の名「凡」にまつわる秘話も大切である。第2次大戦後のアメリカ占領時、最高司令官マッカーサー元帥の軍事秘書ポナー・フェラーズは天皇を戦犯として裁かないよう進言し、象徴天皇制

の実現の端緒を築いた人物だが、彼と小泉家とは浅からぬ関係があり、祖父一雄氏はポナーの了解を得てここから孫である著者を「凡」と命名した話

もまた奇談であろう。

「如意輪観音の呪い」

では第2次大戦前、小泉家が貸前店で購入した如意輪観音を中庭に置いた

と、そのころ、それを紹介した

著者の海外旅行の中で、意外な縁者との出会いや発見の数々は、祖先の運命の糸に操られていると思えない不思議なものであるが、このようにして八雲の偉大さが、世界各国に根付いていくものであることを、

著者の名「凡」にまつわる秘話も大切である。第2次大戦後のアメリカ占領時、最高司令官マッカーサー元帥の軍事秘書ポナー・フェラーズは天皇を戦犯として裁かないよう進言し、象徴天皇制

の実現の端緒を築いた人物だが、彼と小泉家とは浅からぬ関係があり、祖父一雄氏はポナーの了解を得てここから孫である著者を「凡」と命名した話

もまた奇談であろう。

「如意輪観音の呪い」

では第2次大戦前、小泉家が貸前店で購入した如意輪観音を中庭に置いた

と、そのころ、それを紹介した

著者の海外旅行の中で、意外な縁者との出会いや発見の数々は、祖先の運命の糸に操られていると思えない不思議なものであるが、このようにして八雲の偉大さが、世界各国に根付いていくものであることを、

著者の名「凡」にまつわる秘話も大切である。第2次大戦後のアメリカ占領時、最高司令官マッカーサー元帥の軍事秘書ポナー・フェラーズは天皇を戦犯として裁かないよう進言し、象徴天皇制

の実現の端緒を築いた人物だが、彼と小泉家とは浅からぬ関係があり、祖父一雄氏はポナーの了解を得てここから孫である著者を「凡」と命名した話

もまた奇談であろう。

「如意輪観音の呪い」

では第2次大戦前、小泉家が貸前店で購入した如意輪観音を中庭に置いた

と、そのころ、それを紹介した

著者の海外旅行の中で、意外な縁者との出会いや発見の数々は、祖先の運命の糸に操られていると思えない不思議なものであるが、このようにして八雲の偉大さが、世界各国に根付いていくものであることを、

著者の名「凡」にまつわる秘話も大切である。第2次大戦後のアメリカ占領時、最高司令官マッカーサー元帥の軍事秘書ポナー・フェラーズは天皇を戦犯として裁かないよう進言し、象徴天皇制

の実現の端緒を築いた人物だが、彼と小泉家とは浅からぬ関係があり、祖父一雄氏はポナーの了解を得てここから孫である著者を「凡」と命名した話

もまた奇談であろう。

「如意輪観音の呪い」

では第2次大戦前、小泉家が貸前店で購入した如意輪観音を中庭に置いた

と、そのころ、それを紹介した

著者の海外旅行の中で、意外な縁者との出会いや発見の数々は、祖先の運命の糸に操られていると思えない不思議なものであるが、このようにして八雲の偉大さが、世界各国に根付いていくものであることを、

著者の名「凡」にまつわる秘話も大切である。第2次大戦後のアメリカ占領時、最高司令官マッカーサー元帥の軍事秘書ポナー・フェラーズは天皇を戦犯として裁かないよう進言し、象徴天皇制

の実現の端緒を築いた人物だが、彼と小泉家とは浅からぬ関係があり、祖父一雄氏はポナーの了解を得てここから孫である著者を「凡」と命名した話

もまた奇談であろう。

トップに 問う

県西部の9市町などをつなぐ県立大学支援協議会から、過疎・高齢化を専門に研究する「地域政策学部」増設の要望を受けた県立大（浜田市野原町）。地元自治体の声にどう対応するのか。また、在学生が犠牲になった県立大生遺棄事件から5年を迎え、事件の風化をどのように防ぐのか。本田雄一学長に聞いた。

（聞き手は西部本社報道部長・松村健次）

理由の一つに「県立大の魅力18歳人口の落ち込みに伴う力向上」を挙げている。

「大学運営の柱となる教育、研究、社会貢献の各分野で、これまで実績を上げてきたという自負があり、『さらに魅力を』と言われても、若干の引掛かりはある。ただ大学受験する

大学の将来計画を検討

遺棄事件を風化させぬ

り善く社会情勢は大きく変化している。県立大も来年、開学15周年を迎える。新学部増設も含め、今後の大学の在り方をあらためて検討する段階に来ているのかもしれない。

「具体的な検討スケジュールは、現在、最優先課題である。短期大学部（松江キャンパス、松江市浜乃木7丁目）の四年制化に向けた準備を進めているが、可能な限り速やかに検討を始めるつもりだ。新学部増設に限定しない」

「私が県立大に赴任した年に発生した重大事件。平岡さんの無念さや両親の気持ちを考えて、胸が締め付けられる思いだ。一日も早く全面解決してほしい」

「学部増設の要望を受けた率直な感想は。『地元・浜田市をはじめ近隣自治体の一致した意見として要望をいただいた。県立大に対する関心の高さと期待の表れで、真摯に受け止めている』

「学部増設の発案者は、県立大の経営委員を務める久保田章市浜田市長。要望

県立大学長
本田 雄一氏



宮城県農学省技術官、東北大学大学院農学研究科博士課程修了。東北大学農学部長、東北大学農学部長、島根県立大学理事長、学長。73歳。

「話が変わるが、県立大1年生だった平岡都さん（当時19）が2009年10月26日夜、浜田市内のアルバイト先からの帰宅途中に行方不明になり、その後、広島県の山中で遺体の一部が見つかった事件から5年を迎える。」

「当時の学生もほとんどいなくなり、事件の風化も懸念される。」

「同様の事件が起きないという保証はない。安全・安心を確保する上でも、事件の記憶を風化させてはならない。事件の翌年、大学構内に平岡さんをしのぶ『ガーデン・オブ・ホープ』という名の花壇を作った。この花壇を維持・管理していくことで、事件のことを『国際舞台で活躍する』という夢を抱いて勉学に励んでいた平岡さんのことを、いつまでも伝えていきたい」

ハネムーンの地・八橋(琴浦)



「琴ノ浦まおこしの会が昨年開いた「小泉八雲とアイルランド音楽の夕べ」(同会提供)

小泉八雲で町おこし

明治の文豪・小泉八雲(ワヅカディオ・ハーン、1850～1904年)が訪れ、「とても愉快でした」と評した琴浦町で、地域団体が八雲とのゆかりを生かした町おこしに取り組んでいる。11月1日には同町八橋で、アイルランドの音楽を奏し「怪談の世界に没る」「小泉八雲とアイルランド音楽の夕べ」を開催する。主催者は「八雲とかわりの深い松江などからもぜひ足を運んでほしい」と話している。

アイルランド音楽の夕べ 楽隊パレード初開催へ

住民でつくる「琴ノ浦まおこしの会」(62人)な 今年八橋を練り歩く初めての試みも展開する。同会の桑本 琴治会長は「新しい企画を入れながら、町を盛り上げたい」と意気込む。高塚良平副会長は「ぜひ松江からも来てほしい」と呼び掛けている。問い合わせは高塚さん、電話090(3748)7520。

住民でつくる「琴ノ浦まおこしの会」(62人)な 今年八橋を練り歩く初めての試みも展開する。同会の桑本 琴治会長は「新しい企画を入れながら、町を盛り上げたい」と意気込む。高塚良平副会長は「ぜひ松江からも来てほしい」と呼び掛けている。問い合わせは高塚さん、電話090(3748)7520。

北栄町由良宿で作られ、八雲が好んだとされる奈良漬を使った弁当の販売もしている。

「小泉八雲とアイルランド音楽の夕べ」は12年から始めた。楽隊が奏する民族音楽や、情感のこもった怪談を聞きながら琴浦名物の牛骨ラーメンなどを楽しむ趣向を受け、参加者が増えている。

誰もがみんな赤ちゃんでした。でも、赤ちゃんのご記憶ってあまりないと思います。『みんなあかちゃんだった』（鈴木まもる作、小峰書店）には、人間が産まれてから3歳になるまでの姿がイラストで紹介されています。おっぱいを飲んでいる姿、お父さんによたれ攻撃をしているところなど、かわいく、クスッと笑ってしまう姿がたくさん収められています。この本を眺めていると、一人の力で大きくなったわけではなく、今の自分や周りの人のことを大切に思えます。

覚えていたい大切なことでも、時とともに忘れてしまうこともあります。『おばあちゃんのきおく』（MEM・フォックス文、ジュリー・ピバス絵、日野原重明訳、講談社）は、記憶が見つからなくなったおばあちゃんとウィルという男の子のお話。ウィルは、おばあちゃんのために「生懸命」思い出の品を集めます。おばあちゃんは、ウィルの集めた品々を見て、大切な記憶を取り戻します。ウィルの

おばあちゃんを思う気持ちが、心を動かしたのでしよう。この本を読んで、自分のおばあちゃんのことを思い、泣いてしまった学生がいまいました。私の中でも大切な記憶です。

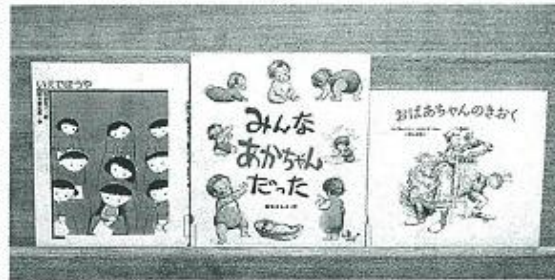
本を読んでいると、子どものごとくに読んだ時の風景や気持ちまでよみがえった経験はありませんか。



<尾崎 智子>

私は『いえでぼうや』（灰谷健次郎作、坪谷令子絵、理論社）がその本です。いたずらっ子のマサトは、いつも怒られてばかり。言うことを聞かず、口答えばかりし、家出を繰り返します。目を覆いたくなるやんちゃぶりですが、お母さんは毎回ちゃんと迎えに来てくれるのです。子どもだった私は、

大切な記憶 ▷▷ 本を開けばよみがえる？



『みんなあかちゃんだった』ほか

それがうれしくて何度も読んでいたのでした。大人になつて読んでも、心に残る場面は一緒でした。人生の全てを覚えておくことは難しい。でも、自然の音に耳を傾けたり、誰かを大切に思ったり、本を開けば、大切な記憶を思い出させてくれるかもしれません。

（島根県立大学松江キャンパスおはなしレストランライブラリー 司書）